

西
初_川等_文
修身_仲書_編

卷五

K110.1
115
6

西川文仲編

卷五

初等脩身書

大黒屋藏版

東國圖書

初等修身書卷五

西川文仲編

○神國に生育し飽食
暖衣の樂を享くるは
皆天祖の恩賚なり。豈
にこれに報ずるゆゑ

んを思はざる可けん
や。徳川齊昭

○天祖の神器を皇孫
に授け賜ひし時より
我が邦君臣父子の大
道既に明なり。會澤安

○君子敬して失ふく
人と恭くして禮あら
ば四海の内皆兄弟な
り。論語

○天地神祇を祈り求
めんよりは父母に孝

を盡すに若かず。雙親は。即ち天地の神なり。
倭論語

○忠信。以て甲冑とあ
し。禮儀。以て干楯とあ
し。仁を載せて行き。義

を抱て處る。家語

○後悔はすべて。疎略
より生し。大難はすべ
て。微細より起る。徳川
齊昭

○唯。君子は。仁義の利

たるを知る。小人は仁
義の利たるを知らざ
るなり。司馬光

○人能く孝弟忠信に
して身を修め業を勤
め夙夜懈らざれば自

から天道に合ひ人倫
に宜しく以て人たる
所を失ふに至らざる
べし。童子問

○善人は人の志を感
ず。善行を聞ては親疎

となく。喜ぶ。悪人は人の貧賤を侮り。富貴を羨み。諂ふものなり。倭論語

○孝弟忠信は。身を立つるの大本。禮義廉恥

は。已れを行ふの先務なり。省心雜錄

○事ハ勉強に在り。勉強して學問すれば。聞見を博くして。智益明なり。漢仲董

○唯愛は以て仁を成すべし。唯断は以て義を制すべし。伊藤仁齋
○禍の来るところ皆利より生ず。苟くも利を求めずんば禍何れ

より生ぜん。蕭元
○小人を待するは寛なるべく。小人を防くは嚴なるべし。五種遺規
○孝子の老を養ふや。

其心を樂ましめ。其志に違はず。其耳目を樂ましめ。其寢處を安し。其飲食を以て。これに忠養す。曾子

○ 朋友には。切切。惸惸。

兄弟には。怡怡。論語

○ 丈夫。一生。廉恥を重しとす。切に。人に求ること。勿れ。死生命あり。

○ 人を待するは。豊かるを要す。自ら奉ずる

は。約なるを要す。

○已れを責むるは。厚
きを要し。人を責むる
は。薄きを要す。續小兒

語

○積て。能く散ずれば。

富。以て保つべきなり。
過て。能く改むれば。徳
以て進むべきなり。尾

藤二洲

○三綱とは。何ぞや。君
臣。父子。夫婦を謂ふな

り。君は臣の綱たり。父
は子の綱たり。夫は婦
の綱たり。白居易通

○儉は萬善の本。奢は
衆惡の基。唯其身成敗
の分るゝ所のみに非

ず。其家儉なれば。福子
孫に流れ。奢るときは。
禍。後嗣に傳ふ。慎まざ
るべけんや。伊藤仁齋

○廉士は財を愛せざ
るに非ず。之を取る道

に由る。古語

○人學なければ仁に似たる。不仁あり。孝に似たる。不孝あり。故に人學なかるべからず。

松平定信

○人は唯正直なるべし。口に偽を言ふべからず。身に私を行ふべからず。

○君父は義理の重きこと。軽重なく。故に忠

と孝とは偏闕し難く。
両全ならざるべから
ず。徳川家康

○言語を慎みて其徳
を養ひ。飲食を節にし
て其體を養ふ。事の至

近にして繋る所至大
なるものは言語飲食
に過ぐるは程子。
○君子は先に擇びて。
而て後に交る。故に尤
め寡し。小人は先に交

りて。而て。後に。擇ぶ。故
に。怨多し。支仲子

○身を謹めは。過なく。
用を節すれば。乏し。か
らず。司馬光

○人。遠き。慮り。なけれ

ば。必ず。近き。憂あり。論語

○人。徳の美なるを。知
るも。善を行はざれば。
形は。人に。して。心は。禽
獸に。同し。

○父母の恩は廣大無量なり。故に本心の暗きものは其恩あるを忘らざるあり。

○學問の道は唯私慾を捨て義理を守るに

あり。中江藤樹

○下を用て上を敬ふ之を貴きを貴ふと謂ふ。上を用て下を敬ふ之を賢を貴ふと謂ふ。孟子

○一介の士。知己に遇ふを得れば。恩に感し。報を思ひて。軀を捐る。況んや。君臣の大義をや。故に君に事へ。身を致すは。臣道の當然な

り。習志篇

○孝悌忠信を。土臺とする。こととは。勿論なり。其次は。禮義廉直智仁勇。此の七を。よく心得べし。何れにも人

の身持は七をよく守
りて。其上に心正しく
身持立派なるやうに
ありたき事なり。林子
平

卷五終

明治十六年十一月十日 版權免許

正價金六錢

近刺教科書目

小學初等作法書

新撰小學書牘

初等修身書首卷

授用

中等修身書

新撰小學地誌

學校用珠算書

猶續々出版

編者

滋賀縣士族

西川文仲

上京區第拾三組真如堂前町三番地寄田

京都府平民

出版人

大黒屋太郎右衛門

上京區第廿二組下丸屋町三番戸

發賣所

京都河原町通二條下二丁目

教科書出版所

大黒屋書舗